

専門教育への橋渡しとしての日本語教育 —『新書ライブラリー』における否定表現の分析より—

工藤嘉名子

キーワード：専門教育への橋渡し教育 否定表現 修辭的表現 文体差
『新書ライブラリー』

1. はじめに

近年、専門教育への「橋渡し」をする日本語教育の必要性が高まっている。その背景には、上級日本語課程を終えて学部・大学院に入ってくる留学生の多くは、上級日本語課程を修了しているにも関わらず、その日本語能力が専門教育を受けるためには十分ではないといった問題がある（横田 1990）。

専門教育への橋渡しを考える際、専門分野と直結した形の橋渡し教育と、いわゆる「大学レベルの日本語」への橋渡し教育に大別できるだろう。前者は、特定の専門分野における内容的知識とともに、そこで必要とされる言語形式の習得を目的としており、主に理工系分野や経済学の分野で、教材開発や基礎研究が進んでいる（岡 1994、小宮 1995、佐藤・仁科 1997、村岡・柳 1996、村田 1994）。一方、後者は、大学で勉学・研究など知的活動を行う上で必要とされる基礎的な知識や日本語能力、学習技能などの習得を目的としており、具体的には、論文を書く、講義を聞く、専門書を読むといった学習技能の習得や、話し言葉と書き言葉の使い分けができる、社会文化的コンテキストの中で日本語を運用できるといった言語能力の習得が挙げられるだろう。前者と後者の重なりは大きいと思われるが、前者の焦点が専門分野の「特殊性」にあるのに対し、後者は専門の枠を超えた「共通性」にあると言える。本稿では、後者の「大学レベルの日本語」への橋渡し教育という枠組みの中で、橋渡し教材の一つである読書支援システム『新書ライブラリー』の言語分析を行う。

読書支援システム『新書ライブラリー』は、上級日本語課程を修了した学習者が、大学生レベルの教養書が自律的に読めるようになることを目指して開発された独習教材（CD-ROM）で、語彙の拡充を主眼にしている¹⁾。しかし、学習者が新書を読みこなしていくには、『新書ライブラリー』の辞書機能だけではまだ十分とは言えず、学習素材である新書の中で使われる日本語の特徴（語彙・表現文型）を分析し、学習のために有効な手だてを考えていくことの必要性が指摘さ

れてきた(鈴木 1999)。学習を困難にしている一つの要因として、上級日本語課程までで既習の表現や文型を、テキストの文脈の中で認定し、うまく理解に結びつけることができないのではないか、ということが考えられる。そこで、本研究では、『新書ライブラリー』の表現の中で、特に使われ方が多様で複雑であると思われた否定表現を取り上げ、その用法を文体的特徴との関係という視点から分析し、専門教育への橋渡し教育における効果的な指導法を考察する。

2. 否定表現をめぐる問題点

否定表現はしばしば日本語学習者にとって理解や習得の難しい学習項目とされている。まず、話し言葉に関して水谷(1989)は、英語話者にとって誤用の多い項目として、否定疑問に対する応答の形、否定文末の予測、部分否定の問題を取り上げている。今田(1990)も、文末の否定表現の省略や、形は否定で意味は肯定の表現、二重否定、部分否定などが、聴解の際に理解を困難にしていると分析している。また、家村(1997; 1998)は、会話文における否定疑問の習得研究から、「～んじゃないか」「～じゃないか」のように、否定疑問は形と意味が一致しない場合が多く、その意味や機能も複雑であるため、中・上級の学習者にとっても習得が困難な学習項目であると結論づけている。

一方、書き言葉について、鮎澤(1990)は、上級教材としてよく用いられる新聞には否定表現が多用されており、それが文章のわかりにくさと関係していると指摘している。否定表現が問題となる具体的な状況として、鮎澤は、(1)文語文法による文型・表現が混在している場合、(2)一つの文型に変種が多い場合、(3)文法的情報以外の前提知識が意味解釈に必要な場合、(4)文型の一部が省略されている場合、(5)形の似た文型が異なる意味を持つ場合、という5つを挙げている。また、書き言葉における学習者の誤用としては、論述文の「論型」を考察した松岡(1995)の研究の中で、「～まい」「～がたい」といった文語的表現の不適切な用法、「～ではないか／のではないか」など形の類似した表現の混乱、「～にほかならない」「～ざるをえない」など修辭性の高い表現の意味や用法の混乱など、否定表現を含む誤用が多数挙げられている。その原因として、形態や意味の上で似通った類似表現の多いことが誤用を引き起こしていると松岡は説明している。さらに、本研究で分析対象とした『新書ライブラリー』の開発研究の過程でも、漢字系学習者が漢字だけを拾い読みし、否定が多く用いられるモダリティに関わる部分を読み飛ばすために、内容の取り違えが生じるのではないかという、学習者の読み方に起因する問題点も指摘されている。

以上を整理すると、話し言葉、書き言葉に共通した否定表現の問題は、「形と意味が一致しない表現」と「形が似ていて意味の異なる表現」という2点に集約

され、その具体的な表現形式としては、否定疑問、二重否定を挙げることができる。また、文語的表現は、書き言葉において特徴的な問題であるとみなすことができよう。

同時に、鮎澤も指摘しているように、「なぜ肯定表現を使わずに否定表現を選ぶのか」という表現意図やレトリックが、否定表現を理解する上で重要であると考えられる。森田(1995)は、否定表現の効果は、肯定形で表すよりも「含みのある婉曲な言い方となる(p.225)」点にあるとし、二重否定の問題を具体例として取り上げている。しかし、「工学系の論文で使われにくい判断表現が(中略)『にちがいない』『のではないだろうか』の類である(佐藤・仁科1997, p.63)」、「二重否定表現が社会科学系の文章でよく用いられ、学習者の目にも触れる機会が多い(松岡1995, p.105)」、「否定的な表現というのは、いわば論説²⁾の象徴のようなもの(高崎1989, P.233)」といった記述にみられるように、否定表現の選択はテキストの分野や文体と密接に関わっていると考えられる。否定表現を用いる表現意図やレトリックを探る上で、文体という枠組みを設定する必要があると言えるだろう。

そこで、本研究では、『新書ライブラリー』の中の否定表現がどのように用いられているのかを、文体的特徴との関連で比較分析していく。具体的には、否定表現の出現頻度、使用頻度の高い文型の特徴、文語的表現、修辭性という4点について分析する。その上で、専門教育への橋渡し教育において否定表現をどのように扱っていけばよいのかを考えてみたい。

3. 分析

3.1. 分析資料

分析は、『新書ライブラリー』収録の8テキストを対象に行った(表1)。

表1 『新書ライブラリー』のテキスト一覧

『書名』	著者名	分野*	文体
『稟議と根回し』	山田雄一	経済・経営	論述
『働くということ』	黒井千次	人生論・教育	論説
『「ゆとり」とは何か』	飯田経夫	経済・経営	論述
『まなざしの人間関係』	井上忠司	言語とコミュニケーション	論述・記述混在
『敬語を使いこなす』	野元菊雄	日本語	解説(話し言葉的)
『タテ社会の力学』	中根千枝	日本人論・日本文化論	論述(専門的)
『タテ社会の人間関係』	中根千枝	日本人論・日本文化論	論述(専門的)
『睡眠の不思議』	井上昌次郎	自然科学と技術	記述(専門的)

*発行は全て講談社現代新書。分野名は講談社現代新書の分類に従う。

これらの新書はいずれも一般向けに書かれた教養書であるという特徴をもつが、文体に関しては、「論説」「論述」「解説」「記述」に分けた。「論述」と「論説」の区別は、学術的根拠に基づいて論が展開されているものを「論述」、筆者の経験に基づいてある事象を説明、解釈しているものを「論説」とした。また、「話し言葉的」は「です・ます体」で口述的なもの、「専門的」は使用頻度の高い名詞の分析(工藤 1998)により専門用語が多いと判断されたものを指す。なお、テキストはいずれも表1に挙げた新書からの一部抜粋である。

3.2. 否定表現の抽出と数量化

それぞれのテキストから、形容詞「ない」「いけない」、否定の助動詞「ない」「まい」「ず」「ぬ」、否定の接尾辞「がたい」「にくい」「かねる」「づらい」などの「否定語」を含む「否定表現」を、用例ごとすべて抽出し、数量化した。その際、「思わず」や「なきにしもあらず」といった語彙や慣用句も「否定語」を含むことから、「否定表現」として扱った。ただし、「不」「無」「非」「未」「ノン」などの否定の接頭辞は本研究の分析の対象としなかった。数量化の際には、基本的には「否定語」1つにつき「否定表現」1つとし、「～ないわけではない」「～ないことはない」といった二重否定は否定語が2つであるため2つと数えた。ただし、「～かねない」「～なければならない」「～なきにしもあらず」などは一種の二重否定ではあるが、意味結合が強いため一つの否定表現として数えた。なお、後の比較検討のために、否定表現の抽出および数量化の方法は、鮎澤(1990)が行った朝日新聞における否定表現調査の方法に従った。

3.3. 分析の手順

『新書ライブラリー』における否定表現の特徴を明らかにするため、抽出した否定表現について以下の分析を行った。

- (1) 文長の異なるテキスト間で否定表現の出現頻度を比較するために、文数に対する否定表現の出現割合を求め、文体的特徴との関連性を考察する。
- (2) 否定表現の中から「否定文型」を取り出し、文型ごとに数量化する。その際、「～とは言えない／思えない」といった語彙のバリエーションや「～にすぎない／すぎず」などの活用形のバリエーションは一つの文型として扱い、「～なければならない」「～ねばならない」「～ねばなるまい」など、意味が同じでも形の異なる表現はそれぞれ別の文型として扱う。次に、8つのテキストのうち3つ以上で用いられている文型を「使用頻度の高い否定文型」として特定し、その特徴を考察する。

- (3) 文語否定助動詞「ず」「ぬ」「まい」を含む表現（慣用的表現を含む）を抽出し、その使われ方を文体的特徴との関連において考察する。
- (4) 「使用頻度の高い文型」を中心に否定表現の修辞性について用例を分析し、文体的特徴との関連性を考察する。

4. 結果と考察

4.1. 否定表現の出現頻度

否定表現が実際に「多用されている」かどうかを調べるために、否定表現の出現頻度を求めた。その際、長さにはばらつきのあるテキスト間で比較するための一つの目安として、文数に対する否定表現の割合を「出現頻度」として算出した。その結果をまとめたものが表2である。

表2 『新書ライブラリー』における否定表現の出現頻度

	← 出現頻度 →							
	高	←	→	低				
	楽議	働く	タテカ学	ゆとり	タテ人間	敬語	まなざし	睡眠
否定表現総数	53	85	39	154	44	124	64	42
文数	67	116	61	249	105	385	220	245
文数/否定表現*	1.24	1.36	1.56	1.62	2.39	3.10	3.44	5.83

*単位：文（値が低いほど出現頻度は高い）

鮎澤（1990）によると、朝日新聞の朝刊では平均4.3文に一つの割合で否定表現が用いられているという。この値と比較すると、『新書ライブラリー』のテキストは「睡眠の不思議」を除いて、新聞の平均よりも否定表現の頻度が高いと言える。また、テキストによって否定表現の出現頻度にかかなり開きがあり、『楽議と根回し』『働くということ』のように否定表現の頻度が高い文章と、『睡眠の不思議』のように頻度が低い文章とでは、文章理解のプロセスに違いが生じるのではないかと推測される。さらに、論説・論述的な文章の方が解説・記述的な文章よりも否定表現の出現頻度が高いという結果が得られた。鮎澤の調査でも、否定表現の頻度は「論壇」「社説」など論説文で最も高いという結果が得られており、本研究の結果と一致している。否定表現が論説文で多用されている理由として、鮎澤は肯定表現が使える場合でも、二重否定など婉曲表現が好んで使われるためではないかと考察しているが、『新書ライブラリー』の中で、実際にどのような否定表現がどのように用いられているかについては、具体的な分析が必要であろう。

4.2. 使用頻度の高い否定文型

8つのテキストの否定表現の中から抽出された否定文型は計 86 項目であった(資料参照)。そのうち3つ以上のテキストで用いられている文型 24 項目を、「使用頻度の高い否定文型」とした(表3)。

表3 使用頻度の高い否定文型 24 項目

出現数*	否定文型(使用頻度延べ) ※下線は文語否定助動詞を含む文型
7	XではなくY (29)
6	～なければならない(26)、 <u>～ず/ずに</u> (11)
5	～かもしれない(28)、～のではないか(21)、～なくなる(19)、 <u>～ざるをえない</u> (8)、～とは言えない/思えない(8)、 <u>～にかかわらず</u> (6)
4	<u>～にほかならない/ぬ</u> (9)、～なくても/なくとも(7)、 <u>～までもない/までもなく</u> (6)、～なくてもいい(5)、～わけではない(5)
3	<u>～のではあるまいか</u> (11)、～にちがいない(10)、～のではない(9)、～ことはできない(7)、～がたい(5)、～なければ(5)、 <u>～を問わず</u> (5)、～きれない(4)、～ほど～は(ほかに)ない(4)、 <u>～にかぎらず</u> (3)

*出現したテキスト数

まず、上記の 24 項目のうち、『日本語能力試験出題基準』(1994)の定める 1 級レベルの機能語は「～までもない」1 項目で、それ以外は全て 2～3 級レベルの機能語であることから、これらは『新書ライブラリー』の対象である上級修了後の学生にとってはほぼ既習の文型であると仮定できる。したがって、こうした既習の文型をどのように扱っていけばよいのかを考えていくことが、専門教育への橋渡し教育における課題となるだろう。

次に、使用頻度の高かった文型をみると、「～ざるをえない」「～のではあるまいか」など文語否定助動詞を含む文型が 7 文型ある。「～にかかわらず」「～を問わず」などは慣用的に用いられる表現であると思われるが、形の上では文語否定助動詞が用いられていることから、ここでは文語的否定表現として扱う。否定表現の問題として文語的表現が指摘されていることは前にも述べたが、文語的表現の使われ方と文体的特徴との間になんらかの関連性があるかどうか、次節で詳しく分析していくことにする。

同様に、使用頻度の高い文型の中には、強調(「～にほかならない」「～までもない」)や否定疑問(「～のではないか」「～のではあるまいか」)など修辭的なものが含まれていることがわかる。松岡(1995)は、論述文³⁾に特有の文型を「論型」と呼び、修辭性に関わる論型を、「限定・非制限動詞文型」「否定動

詞」「二重否定動詞」「否定疑問文型」「二重否定述語文型」の5つに分類している。論述文では、書き手の評価や判断に対する確信の強弱を表現することが多いため、否定を中心としたこのような論型が用いられるという。松岡の挙げた個々の否定表現文型の詳細は省くが、その中には、本研究で使用頻度の高かった修辭的否定表現が含まれており、文体と文型との関係を考える上で興味深い。しかし、文体の差によって否定表現文型の用いられ方にも違いがあるのか、また、これまで修辭性と結びつけてとらえられてこなかった表現の中に修辭的なものはないのかという点については、やはり用例分析が必要である。

4.3. 文語的否定表現

文語的否定表現がどのように使われているのかを分析するため、全否定表現の中から、文語的否定助動詞「ず」「ぬ」「まい」を含む表現（慣用句を含む）を抽出し、それぞれの助動詞について使用の有無をまとめたものが表4である。まず、中止形の「～ず／ずに」は慣用句を含めると全てのテキストで使われていたのに対して、それ以外の助動詞はテキストによって使用状況が異なっていた。「～ず」は、「思わず」「とりあえず」などの語句や「～にかかわらず」など慣用的に用いられる文型として出現しており、文語という印象が薄い。また、中止形「～ず／ずに」に対応する口語形「～ないで」が用いられていないことから、書き言葉では自然に「～ず／ずに」という中止形が選択されると考えられる。したがって、「～ず」については文体的特徴との関連性を考察することは難しい。

これに対して、文語の「～ざる」「～ぬ」「～ねば」「～まい」と口語の「～ない」「～なければ」の選択は、文体や書き手の好みと密接に関わっていると考えられる。まず、これらの文語表現は、解説的で話し言葉的な「敬語を使いこなす」や記述的な「睡眠の不思議」では全く使われていなかった。一般に文語的表現を用いた文章は固い、技巧的な印象を与えるため、そうした効果をねらう必要がない解説や科学的記述では文語的表現自体使われることが少ないのではないかと推測できる。

表4 文語否定助動詞の使用状況

基本形	出現形	稟議	働く	ゆとり	まなざし	タテ人間	タテ力学	敬語	睡眠
ず	～ず／ずに	○	○	○	○	○	○	○	○
	～ざる	○	○	○	○	○	○	×	×
ぬ	～ぬ	○	○	○	○	×	×	×	×
	～ね(ば)	○	○	×	×	×	×	×	×
まい	～まい	○	○	○	○	×	×	×	×

次に、「～ねば」「～ぬ」「～まい」について、用例を挙げて説明を加える。

- (1) あまりに時代が変わってしまったのだからな、とほくは咳かねばならなかった。(『働くということ』)
- (2) それだけは是非とも言わねばならぬし聞かねばならぬ部分が、一方は「所属企業名」であり、他方は「担当職務名」であるという点はきわめて重要な相違点だといわなければなるまい。(『稟議と根回し』)
- (3) そこまで考える必要はあるまい—という考えもあるかもしれない。(『「ゆとり」とはなにか』)
- (4) イタリア人の間には、この「目のやり場に困る」ということが、ほとんど問題にならぬ のではあるまいか。(『まなざしの人間関係』)

まず、用例(2)(4)のように、「～ぬ」「～ねば」「～まい」が一文の中で共起する例が他にも見られたが、これは文語的な響きを統一するためであると考えられる。「～ねば」「～ぬ」について、用例(1)(2)をみると、書き手の主観や思い入れが強いという印象を受け、口語の「～なければならない」では表現の重みが減じてしまうようである。同様に、「～まい」も書き手の主張を強める上で効果的に用いられていると言える(用例(2)～(4))。また、同一の書き手が「～ねばならない」と「～なければならない」、「～ではあるまいか」と「～ではないか」を使い分けていることから、ここでは文語的表現が意図的に選択されていると考えられる。こうした「～ねば」「～まい」は論説文や論述文でも主観的要素が強い『稟議と根回し』では用いられているが、学術論文的な論述である『タテ社会の人間関係』『タテ社会の力学』では用いられていない。これは、一般に論説文では文語表現などを技巧的に使いこなすこと、表現のバリエーションが豊かであることが文章力の評価につながるのに対して、学術論文では一般に主観的に意見を述べるのが避けられることと関係があるのではないかと推測される。

4.4. 否定表現にみる修辞性

否定表現というのは、本来ある事柄を否定するために用いられるものであるが、学習者にとって特に問題になると思われるのは、否定以外の意味や効果をもつ否定表現、つまり修辞的に用いられる否定表現であろう。そうした修辞性の高い否定表現としては、否定疑問や二重否定表現が取り上げられることが多いのは前述の通りである。しかし、本研究で使用頻度の高かった否定表現の用例をみていくうちに、これ以外にも修辞的に用いられていると思われる表現があることがわかった。それは、対比強調表現「XではなくY」と、ある特定の文脈における「～

かもしれない」の2つである。そこで、否定疑問と二重否定表現にこの2つの表現を加え、それぞれの表現の修辭的効果、および文体的特徴との関連を考察していくことにする。

4.4.1. 対比強調： XではなくY

否定文型の中で最も出現頻度の高かった「XではなくY」は、初・中級の教科書では「彼に会ったのは昨日じゃなくておとといだ」といった訂正の表現として扱われることが多いが、Xを否定することによりYの肯定を対比的に強調する修辭的表現である。ここで、XとYの意味的関連に着目して用例をみると、(1)(2)のようにXとYがもともと対義語や対極の概念である場合には、たしかに対比強調としての機能が強いようだ。一方、(3)(4)の場合、XとYは必ずしも対極の意味をもつわけではなく、「XではなくY」という文型によってはじめて対立概念として成立する。このような場合、Xの否定は、Yを強調するというよりは、むしろYの意味を限定し、明確にする働きが強いようである。用例としては後者の例は29例中24例あった。「XではなくY」は肯定部の強調だけではなく、意味の明確化をねらった修辭的表現であること、否定部分によって規制された肯定部分の意味を理解しなければならないという指導が必要だろう。

- (1) 個人は決して不可分 indivisible ではなく、divisible であるという哲学に立っている。(『タテ社会の力学』)
- (2) 結局のところ人びとは、“総論”ではなくて“各論”で物事を考えるのかもしれない。(『「ゆとり」とは何か』)
- (3) 現代の学生にとっては、就職とは職業に就くことを指すのではなく、むしろこれから職業を探し始めることを意味するのだ、と。(『働くということ』)
- (4) オルポートが人間とは「在る」ものではなくて「成る」ものだと強調しているのもそのためである。(『稟議と根回し』)

この表現は、『タテ社会の人間関係』『タテ社会の力学』『稟議と根回し』『働くということ』など論述・論説で多く用いられており、論述・論説における概念の規定や論の説得性と結びついた修辭的表現ではないかと推測される。

4.4.2. 否定疑問： ～のではないか／～ではあるまいか

否定疑問の「～のではないか」「～ではあるまいか」は、一般に書き手が多少疑問を残しながら自分の考えを述べるときに用いられるとされているが、使わ

れ方によりその修辭的効果に違いがあることがわかった。まず、「～のではないか」についてはその用例を、文末の「～のではないか／～のではないだろうか」、主観的な動詞を伴う「～のではないかと思う」、引用の「～のではないか、と～」に分けて考えることができる。

- (5) 必ずしも仕事そのものを就職の目標としているとは言い難いのではないか。
(『働くということ』)
- (6) 動きの方向としては、“失業と飢えの恐怖”が復活しつつあるのではないだろうか。(『「ゆとり」とは何か』)
- (7) これがしかし、就職を迎えるに際しての大部分の学生の実情なのではあるまいか。(『働くということ』)
- (8) 「手」が「お手」になるのはこの場合は確率が少し下がるのではないかと
思います。(『敬語と使いこなす』)
- (9) よけいな睡眠そのものが疲労をおこさせるのではないかとタウプは疑問
を投げかけている。(『睡眠の不思議』)

文末の「～のではないか」「～のではあるまいか」は、用例(5)(6)(7)にみるように、直接疑問の形で意見陳述がなされており、それだけ書き手の主張、読み手への働きかけは強いようである。それに対し、(8)のように後ろに「～と思う」がつくと、主観的な意見陳述であることにかわりはないが、間接疑問になるため主張の度合いは弱まる。そして、(9)には書き手の意見陳述としての機能はなく、修辭的効果はないと言える。

(5)～(8)のような主観的な表現は、記述文である『睡眠の不思議』や専門的な論述文である『タテ社会の人間関係』『タテ社会の力学』では全く用いられていなかった。これは、記述文や学術的論述文では書き手の主観的な意見陳述が避けられることと関係があると推測される。「～のではないか」「～のではあるまいか」を指導する際には、こうした使われ方の違いを文体的特徴や修辭的効果との関連で捉えていくことが求められるだろう。また、客観性が求められる学術論文で好まれる「～のではないかと考えられる／考察される」といった意見陳述の表現は、新書を対象にした本研究では用例がなかったが、合わせて指導していく必要があるだろう。なお、「～のではあるまいか」はすべて文末表現として用いられていたが、文語的表現であるせいか、「～のではないか」よりも書き手の主張は強く感じられる。おそらく文末にくる「～のではないか」「～ではあるまいか」は、主観的な要素が強い論説文や投書などの意見文で好まれるのではないかと推測される。さらに、(5)(7)のように同一の書き手が「～のではないか」と「～のでは

あるまいか」を使い分けているが、それが主張の強さによるものなのか、あるいは表現を豊かにするために同一表現を避けるという表現技法であるのか、この点については単文レベルではなく、段落などまとまりをもった文脈の中で考えていく必要があるだろう。

4.4.3. 二重否定： ～ないはずがない／～ないわけではない他

使用頻度の高い否定文型には入っていなかったが、否定表現の修辭性を考える上で二重否定を無視するわけにはいかないだろう。二重否定には、用例(10)(11)の「～ないはずがない」「～ないわけにはいかない」など、否定を重ねることで肯定の意味を強めるもの(4)と、用例(12)(13)の「～ないではない」「～ないわけではない」など否定を重ねると断定を避けた婉曲的な肯定になるものがあるが、いずれも肯定表現では表せない修辭的な効果をねらった表現である。強調の二重否定には他に「～ないものはない」「～ないではいられない」などがあり、婉曲の二重否定には「～ないことはない」「～ないとは言えない」などがある。

- (10) 人類史上でも画期的ともいうべきこの変化が、人びとの思考や行動に、さまざまな影響を与えないはずがない。(『「ゆとり」とはなにか』)
- (11) 自分を同一化する対象を私たちは“会社という職場”に求め、彼らは“職業という担当職務”に求めている点には大きなひらきがあることを認めないわけにはいかない。(『稟議と根回し』)
- (12) 最後の「ませ」も丁寧すぎる感じがしないでもありませんが、…(『敬語を使いこなす』)
- (13) しかし、わが国に雇用契約がないわけではなく、かの国に所属意識がないわけではないことを見れば、…(『稟議と根回し』)

学習者にとっては、どれが強調でどれが婉曲か、形が似ているだけに、その見分けが問題になると思われる。しかし、形の上で両者を見分けるのは困難であるため、二重否定の指導の際には、意味の確認とともに、それぞれの表現がどのような修辭的效果をねらっているのかを意識的に捉えていくことが必要であろう。

また、強調も婉曲も書き手の主観が強いということを考えると、客観性が求められる科学的記述文や学術論文では、二重否定は避けられる傾向にあるのではないかと考えられる。ちなみに『睡眠の不思議』『タテ社会の人間関係』『タテ社会の力学』では、全く二重否定が使われていなかった。同様に、二重否定は回りくどい技巧的な表現であるため、おそらく簡潔明瞭がよしとされる事務的な報告書、マニュアルなどの文体でも避けられる表現技法であると予想される。それと

は対照的に、学術論文以外の論述文、あるいは論説文では二重否定が多用される傾向があるということは、鮎澤（1990）、高崎（1989）、松岡（1995）などでも指摘されており、二重否定の指導は、主観的な文体であるか客観的な文体であるかという視点から使い分けを意識化させていくことが有効であろう。

4.4.4 読み手を意識した婉曲表現： ～かもしれない

推量の「～かもしれない」はそれ自体は修辭的な表現ではないが、用例を分析した結果、修辭的に用いられている文脈があることがわかった。用例(14)(15)はどちらも推量であることにはかわりないが、推量の対象は読み手の反応である。あらかじめ読み手の反応（多くは反論）に言及することで、自分の判断・評価に対して婉曲的に自己防衛する働きがあると言える。

(14) しかし、あるいは多くの読者はこういう言い方を極論と受け取るかもしれない。（『「ゆとり」とは何か』）

(15) 少し辛すぎるかもしれませんが…マイナス一点としておきましょう。
（『敬語を使いこなす』）

このような「～かもしれない」の用法は、論説や随筆、投書といった、主観的で、そのために読み手の反応を強く意識して書かれる文章では目にするのがあっても、学術論文ではまず見られないのではないかと予想される。「～かもしれない」が事柄に対する推量、弱い陳述の表現としてだけでなく、このように読み手との関わりの中で修辭的に使われるということ、指導の際、意識的にとりあげていく必要があるだろう。

5. 分析のまとめと今後の課題

ここまで『新書ライブラリー』の否定表現について、出現頻度、文語的否定表現の使われ方、否定表現の修辭性を分析し、文体的特徴との関連性を考察してきた。まず、否定表現は論説・論述のテキストで出現頻度が高く、解説・記述のテキストで低かったことから、否定表現の頻度と文体には関連があると考えられる。次に、「～ず」以外の文語否定助動詞は書き手の好みや文体により選択的、効果的に用いられており、中でも「～ねば」「～まい」は書き手の主観が強い論説文などで使われる表現ではないかと推測される。さらに、否定表現の修辭性について用例を分析した結果、対比強調の「XではなくY」には肯定部分の意味を明確にする機能もあること、否定疑問は用法によって修辭的效果が異なること、二重否定には強調の二重否定と婉曲的肯定の二重否定があること、「～かもしれな

い」には読み手を意識した婉曲的な意見陳述としての用法があることがわかった。こうした修辭的表現も、上述のように文体的特徴や書き手の表現意図と深く関わっていると見える。ただし、本研究では新書の中での文体差しか検討できなかったため、否定表現と文体との関連性についての考察はあくまでも仮説の段階である。また、否定表現の使われ方の違いが文体差であるのか個人差であるのかを明らかにするためにも、社説などの論説文、ガイドブックなどの解説文、客観的・科学的な記述文、学術論文的な論述文など、文体差がより明確なテキスト群を対象に仮説の検証をしていく必要があるだろう。さらに、専門教育への橋渡しを考える上で、書き言葉だけではなく、特に講義など話し言葉における否定表現の分析も重要であろう。

6. むすびに

専門教育への橋渡しとしての日本語教育を考えていく一つの試行として、本研究では否定表現を取り上げた。専門教育への橋渡し教育では、大学教育で必要とされる基礎的知識や学習技能が何であるかを明らかにしていくと同時に、学習素材の中の表現や談話構造などについて、表現意図や文体との関わりの中で、「なぜこのように表現するのか／しないのか」を意識的に指導していくことが重要であろう。また、そうした文脈の中で、上級日本語教育までに既習の文型や表現を捉え直し、「大学レベルの日本語」として運用できるように再構築していくことが求められるであろう。

註

- 1) 『新書ライブラリー』のもとになった新書8冊は、日本語教育支援システム研究会が開発したデータベース CASTEL¹ に収録されている新書40冊の中から選んだ。開発研究の詳細については、鈴木(1999)を参照されたい。
- 2) 高崎(1989)は「論説」を「ある問題についての、自分の意見・主張の正しさ・妥当さを、論証的・解説的に述べ、読者を説得しようとする文章である」と定義し、具体的には社説・論文・書評・文芸時評・エッセイをとりあげている。本稿では「論述」「論説」を区別しているが、これは高崎の定義によれば、前者は論証的な論説、後者は解説的な論説という別に相当する。
- 3) 松岡(1995)における「論述文」は、論理的な文章を広く指していると考えられる。本稿では、「論述」をより限定的に狭い意味で用いている。
- 4) 「～ざるをえない」「～かねない」「～なければならない」も肯定的な事態の絶対性が強調される二重否定であるが、これらの形式的二重否定は用例分析の対象とはしなかった。

引用文献

- 鮎澤孝子（1990）「新聞と否定表現」『日本語学』12月号 pp. 18-27.
- 家村伸子（1997）「中国語母語話者の否定疑問文習得に関する基礎的研究」
『広島大学日本語教育学科紀要』7号 pp. 81-88.
- 家村伸子（1998）「第二言語習得における教室指導の効果 否定疑問文導入の授業を通して」『広島大学日本語教育学科紀要』8号 pp. 49-57.
- 今田滋子（1990）「日本語学習者の否定表現理解の諸問題」『日本語学』12月号 pp. 76-81.
- 岡益巳（1994）「経済学部留学生のための経済用語の指導について」『日本語教育』82号 pp. 23-33.
- 工藤嘉名子（1998）「読書支援システム『新書ライブラリー』における高頻度名詞の分析」『日本語教育方法研究会誌』vol. 5 No. 2 pp. 20-21.
- 国際交流基金・日本国際教育協会（1994）『日本語能力試験 出題基準』凡人社
- 小宮千鶴子（1995）「専門日本語教育の専門語—経済の基本的な専門語の特定をめざして」『日本語教育』86号 pp. 81-92.
- 佐藤勢紀子・仁科浩美（1997）「工学系学術論文にみる『と考えられる』の機能」『日本語教育』93号 pp. 61-71.
- 鈴木庸子（1999）「日本語学習者を対象とした読書支援システムの開発」
『文部省科学研究費補助金重点領域研究「人文科学とコンピュータ」
1998年度研究成果報告書』（研究代表者及川昭文）CD-ROM版
- 高崎みどり（1989）「論説の文体」『講座日本語と日本語教育 第5巻
日本語の文法・文体（下）』明治書院 pp. 212-240.
- 松岡弘（1995）「論述文における『論型』の指導について」『言語文化』
32号 pp. 87-108.
- 水谷信子（1989）『日本語教育の内容と方法：構文の日英比較を中心に』
アルク
- 村岡貴子・柳智博（1996）「農学系学術雑誌の語彙調査 専門分野別日本語教育の視点から」『日本語教育』91号 pp. 80-89
- 村田年（1994）「上級日本語教育の方法を探る 経済学の実用表現文型」
『日本語と日本語教育』23号 pp. 1-24.
- 森田良行（1995）『日本語の視点：ことばを創る日本人の発想』創拓社
- 横田淳子（1990）「専門教育とのつながりを重視する上級日本語教育の方法」
『日本語教育』71号 pp. 120-133.

（立命館大学）

資料 『新書ライブラリー』の否定表現文型一覧

No.	否定文型	直観	働く	タテカ	ゆとり	タテ人	敬語	まな	暗黙	計	出現	No.	否定文型	直観	働く	タテカ	ゆとり	タテ人	敬語	まな	暗黙	計	出現
1	～ではなく～	5	5	5	1	9	3		1	29	7	44	～ないてください						2			2	1
2	～なければならぬ	3			4	5	10	2	2	26	6	45	～ないわけではない	2								2	1
3	～ず/～ずに		3	1		1	2	1	3	11	6	46	～もしない			2						2	1
4	～かもしれない		3		15		5	3	2	28	5	47	～かねない			1						1	1
5	～のではないか		2		13		1	2	2	20	5	48	～さえ～ない			1						1	1
6	～なくなる				13	2	1	1	1	18	5	49	～すら～ない			1						1	1
7	～ざるをえない	2	1		2	1		2		8	5	50	～するか否か		1							1	1
8	～とは書えない/思えない		2	1	1		3	1		8	5	51	～だからといって～ではない								1	1	1
9	～にかかわらず		1	1	2		1	1		6	5	52	～だけが～ではない			1						1	1
10	～にはかならない/ぬ	2	1		3			3		9	4	53	～だけではない			1						1	1
11	～なくても/なくとも				2	3	1	2	1	9	4	54	～てはいしめない	1								1	1
12	～までもない/までもなく	1	2		2	1				6	4	55	～でなくとも			1						1	1
13	～なくてもいい	1	1				2		1	5	4	56	～てならない		1							1	1
14	～わけでもない/わけではない		2		1		1	1	5	4	57	～てはいけない						1				1	1
15	～のではあるまいか		7		3		1	1	11	3	58	～てはいらない							1			1	1
16	～にらがない		2		5		3		10	3	59	～てはならない						1				1	1
17	～のではない		1		5		3		9	3	60	～でもなく～もない					1					1	1
18	～ことはできない	3	2					2	7	3	61	～どころの騒ぎではない				1						1	1
19	～がたい	1	2		2				5	3	62	～ないだけの～							1			1	1
20	～なければ		1				2	2		5	3	63	～ないと～ない						1			1	1
21	～を問わず			1	2	2			5	3	64	～ないどころか		1								1	1
22	～きれない	2			1			1	4	3	65	～ないはずがない				1						1	1
23	～ほど～は(ほかに)は ない			1			1	2	4	3	66	～ないようになる		1								1	1
24	～にかぎらず		1		1			1	3	3	67	～ないわけにはいかない		1								1	1
25	～にすぎない/すぎず			1	11				12	2	68	～ない方がいい						1				1	1
26	～てもらえないか		1				4		5	2	69	～なくてもかまわない						1				1	1
27	～ねばならない/ならぬ	2	3						5	2	70	～なければ～ない			1							1	1
28	～ばかりでなく			2		3			5	2	71	～なければなるまい		1								1	1
29	～と賢って/見てさしつかえない	3						1	4	2	72	～など～ない				1						1	1
30	～しか～ない				2			1	3	2	73	～にかわりない						1				1	1
31	～しかない		2		1				3	2	74	～にとどまらず				1						1	1
32	～ないではないか		1		2				3	2	75	～にはあたらぬ		1								1	1
33	～ないでもない/ないではない	1					2		3	2	76	～に及ばない						1				1	1
34	～ないように					2	1		3	2	77	～ばかりでなく～もない				1						1	1
35	～にくい					2		1	3	2	78	～はずがない					1					1	1
36	～ぬ		2					1	3	2	79	～べくもない			1							1	1
37	～必用はない					1	2		3	2	80	～ほかない										1	1
38	～あるまい	1			1				2	2	81	～ほどではない						1				1	1
39	～えない			1	1				2	2	82	～ほどのことはない						1				1	1
40	～ないと書						3		3	1	83	～もないし、～もない		1								1	1
41	～なかつたら						3		3	1	84	～ようとはしない				1						1	1
42	～ことはない					2			2	1	85	～わけにはいかない					1					1	1
43	～すらない				2				2	1	86	～わけはない										1	1

**Pedagogical Implications for College Level JSL Education:
An Analysis on Negative Expressions from "Shinsho Library"**

Kanako KUDO

Key word: college level JSL, negative expressions, rhetorical expressions, text type differences, "Shinsho Library"

1. The purpose of the study

JSL (Japanese as a second language) students in Japanese universities need to acquire not only technical Japanese for their own major field of study, but also basic academic Japanese, in order to successfully conduct their course work. The reading support system "Shinsho Library", consisting of eight texts from *Shinsho* books, is designed for those students who have finished an advanced Japanese course and who want to further develop their vocabulary by extensive reading of college level reading materials.

Though vocabulary as a limiting factor in reading comprehension is emphasized, many other factors also apparently make students' reading comprehension difficult. One of these is the complicated usage of negative expressions in the texts. This study, therefore, attempts to clarify how negative expressions are used in the *Shinsho* books and attempts to provide pedagogical implications for college level JSL classrooms. Specifically, this study will analyze the following aspects of the negative expressions in relation to the text types: frequency, grammatical patterns of high frequency, archaic expressions, and rhetorical expressions.

2. Data

The eight texts of the "Shinsho Library" were classified into four text types: essay (*ronsetsu*), expository (*ronjutsu*), explanatory (*kaisetsu*) and theoretical (*kijutsu*). All the negative expressions that include negative adjectives (*nai, ikenai*), auxiliaries (*-nai, -mai, -zu, -nu*) or suffixes (*-nikui, -kaneru, -zurai*) were extracted from the texts and quantified in frequency.

3. Analyses

First, the frequency of negative expressions (i.e. the number of